

イラン、カスピ海南西岸域における 鉄器時代文化の地域性とその変化

—土器分析を中心に—

有松 唯

Regional Variability of the Iron Age Pottery and its Temporal Changes on the Southwest Caspian Coast

Yui ARIMATSU

セフィード・ルード川西岸から新たに得られた考古資料を用いて副葬品としての土器を比較することにより、カスピ海南西岸域における鉄器時代の葬送慣習からみた地域性とその変容過程を明らかにする。また、その変容過程において、鉄器時代Ⅱ期からⅢ期にかけてそうした土器が齊一的になり、あらたな中心集落が出現するという画期が存在することを指摘する。さらに、そうした変化から、イラン系王朝出現という歴史的事象に関して新たな知見をもたらし得ることを指摘する。

キーワード：セフィード・ルード川、イラン鉄器時代、土器組成、葬送慣習、メディア

This paper examines regional variability of the Iron Age culture and its chronological changes in the southwest coastal region of the Caspian Sea, north Iran. The material used for analysis consists of pottery from Iron Age cemeteries including those newly discovered on the west bank of the Sefid Rud River. One of the major conclusions of this study is that patterns of regional variability radically changed at the beginning of the Iron Age III period. Regionally diversified pottery assemblages of the previous periods were replaced by a rather uniform assemblage in this period. Furthermore, a large central settlement appeared in the local community of the study area. This dramatic change may reflect cultural reorganization triggered by the emergence of Iranian dynasties.

Key-words: Sefid Rud River, the Iron Age of Iran, pottery assemblage, funeral practices, Media

I. はじめに—研究の目的—

アルボルズ山脈からカスピ海に注ぐセフィード・ルード (Sefid Rud) 川流域は嘴形注口付土器や形象土器といったイランの鉄器時代を代表する遺物が多数出土する地域として知られている。また、墓地群の出現やそこでの石槨墓の多用といったこの地域の遺物以外の文化的特徴も、イランの鉄器時代の指標とされている。よって、当該地域の物質文化を明らかにすることでイランの鉄器時代文化に関する新たな知見をもたらすことができる可能性は非常に高い。しかし、この地域がそうした遺物を有しえた背景や、そこで生じた鉄器時代の社会及び文化変化の様相、その歴史的な位置づけなど、基本的な事柄がほとんど解明されていない状態にある。

そうしたなか、近年イラン・日本共同調査隊の考古学的調査やイラン当局の新たな発掘調査により、とりわけその様相が不明瞭であったセフィード・ルード川西岸における考古資料が増加し、当該地域全体を包括的に分析すること

が可能となってきた。そこで本稿では上述した点を明らかにする端緒とすべく、こうした新たな資料を含めて既存の資料を再検討し、副葬品として用いられた土器組成の地域性及び土器動態の分析をおこなう。さらに、それらを通して葬送慣習からみた地域性と鉄器時代を通してのそれらの変容過程を把握することを試みたい。その際、イラン鉄器時代史という歴史的背景との関連を念頭において分析を進めることとする。

II. 分析の対象と方法

分析の対象となるのはカスピ海南西岸域に広がるセフィード・ルード川を中心とした地域と、セフィード・ルード川からクーヘ・ダルファク (Kuh-e Darfak) 山を隔てて東方のチャーク・ルード (Chak Rud) 川流域にあるデーラマン (Dailaman) 地域である (図1)。当該地域はカスピ海からもたらされる湿った空気の恩恵をうけているため平野部では稲作が可能なほど湿潤な気候となっている。ア

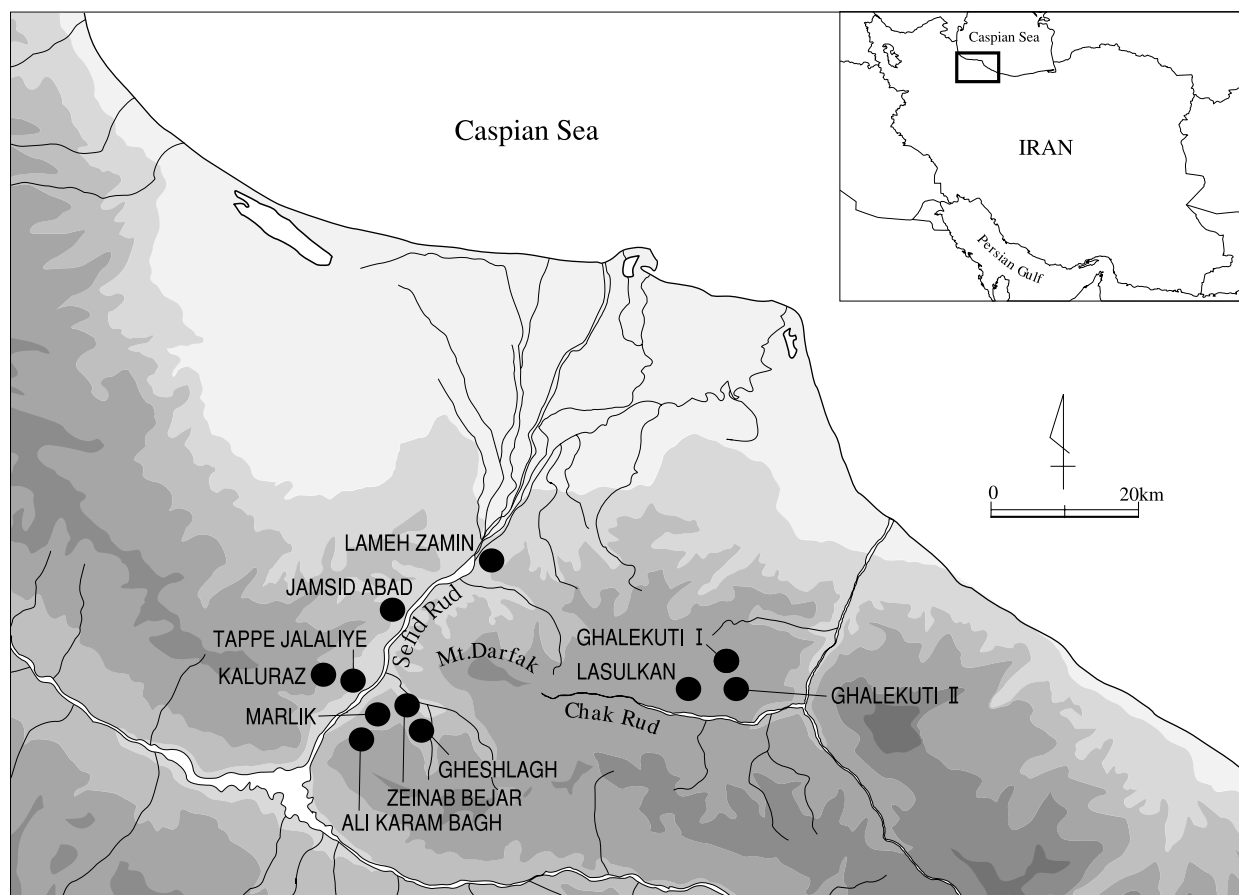


図1 カスピ海南西岸域で発掘された鉄器時代の遺跡

ルボルズ山脈の一部を成す標高約 2700 m のクーヘ・ダルファク山も山麓から中腹にかけては鬱蒼とした森林に覆われている。デーラマンはそのダルファク山を含む山塊に囲まれた盆地状を呈しており、周辺と比すれば比較的なだらかな傾斜が続く。一方、セフィード・ルード川流域も比較的平坦で視界も開けている。とはいえ周囲はそうした山々に囲まれており、また、セフィード・ルード川自体が当該地域を2分しているとも捉え得る。このような地理的制約下にあるということが当地域の特徴であるといえよう。そして、当時の文化圏の形成等にもこうした地理的制約は大きな意味を持っていたと考えられる。

そこで、分析に際しては、土器から導かれた地域性や土器動態の性格に対する理解を容易にするために、当該地域を地理的単位（河川、盆地、丘陵、山麓など）ごとに区分する。そのうえで、遺跡ごとではなくその地理的単位ごとに分析を行いたい。ここでの地理的単位とは、セフィード・ルード川の西岸と東岸、セフィード・ルード川からクーヘ・ダルファク山を隔てたチャーク・ルード川流域のデーラマン盆地である。

分析の中心となる遺物は副葬品としての土器である。副

葬品の土器は日常雑器とは異なり、利便性等に左右されない存在であると想定される。また、なんらかの社会関係も反映していると考えられるため、その変化は日常生活慣習の変化以上の変化を伴うものであると推測できる。よって、住居址等から出土する土器を対象とした分析とは異なる知見が得られる可能性が高いと考えた。

土器についてはまず器形に基づいて分類をおこない、次にそれらの組み合わせによる土器組成を地理的単位ごとに導き、比較を行う。そのなかで細かい形態の特徴に関しても適宜触れたい。さらに、実見が可能であった資料に関しては、器形とあわせて胎土や製作技法を含めた分類も適応させ、比較を行いたい。土器組成の分析といった場合、本来ならば集落における土器組成の比較をすべきであり、副葬品のみを対象としてしまうと、特定の地域のみで出土すると判断された土器に関しても集落でならば多くの地域で出土するといった場合もおおいに考えられる。ただ、本稿で目指すのはあくまで副葬される土器の変化と、それにより葬送慣習を基準とした地域性を把握することであるため、墓から出土した土器のみを分析の中心とする。よって、分析の対象となる遺跡はセフィード・ルード川流域で発掘

調査がおこなわれ、鉄器時代の墓が確認された 10 遺跡、
 キャルラズ (Kaluraz)、ジャムシード・アーバード
 (Jamsid Abad)、マールリーク (Marlik)、アリ・キャラ
 ム・バーク (Ali Karam Bagh)、ゼイナブ・ベジャール
 (Zeinab Bejar)、ゲシュラーグ (Gheshragh)、ラーメ・
 ザミーン (Lame Zamin)、ガレクティ I 号丘 (Ghalekuti
 I)、ガレクティ II 号丘 (Ghalekuti II)、ラスルカン
 (Lasulkan) である (図 1)。また、墓以外の遺構が確認さ
 れているタッペ・ジャラリエ (Tappe Jalaliye) も補足
 的に用いることにした。このうち、土器の実見が可能であ
 ったのはキャルラズ (テヘラン国立博物館所蔵)、ガレ
 クティ I 号丘及び II 号丘、ラスルカン (東京大学総合研究
 博物館所蔵)、タッペ・ジャラリエ (ギーラーン州考古
 局所蔵) の 5 遺跡についてである。ジャムシード・アーバ
 ード、マールリーク、アリ・キャラム・バーク、ゼイナ
 ブ・ベジャール、ゲシュラーグ、ラーメ・ザミーンについ
 ては報告書の記載に基づいて分析を行った。

Ⅲ. 分析

1. 土器の分類と編年

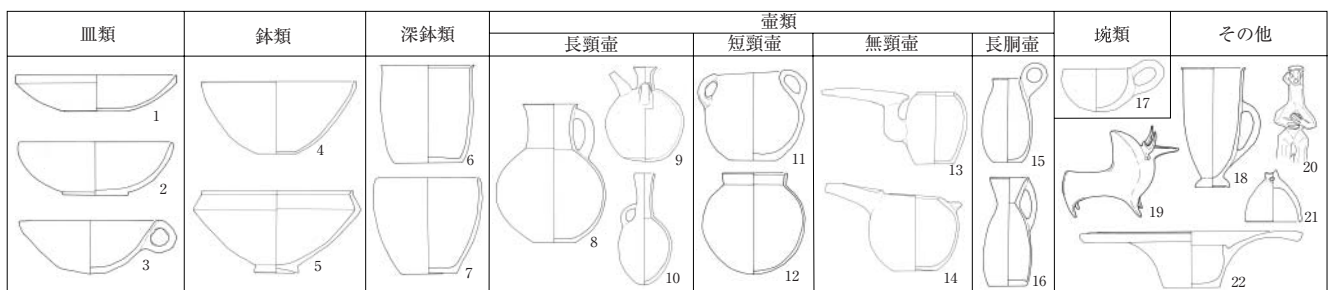
(1) 器形分類 (図 2)

器形分類は、本来ならば土器の機能に基づいたグループ

ごとに実施すべきであるが、今回対象とした資料は器形か
 らはその機能を推測することが不可能なものが多い。また、
 上述したように土器のほとんどは副葬品として用いられた
 ものであり、出土状況からもその機能を判断することはで
 きない。そこで、ある程度数量的に把握しうるプロポーシ
 ョンで皿類、鉢類、壺類、碗類、その他の器形というよう
 に大別し、さらに口縁や底部などの細部の形態によって細
 分した。したがって、ここで用いた呼称は便宜的なもので
 あり、必ずしもその機能を反映したものではない。把手な
 どは分類の基準としては用いなかったが、特徴的な観察が
 得られた場合などは以下の分析の中で適宜言及する。また、
 その他の中には土偶や形象土器なども含めた。これらは注
 口が付いていたり、中空で容器状になっていたりと、土器
 と近似した用途が想定されるためである。

(2) タイプ分類 (表 1)

上述したようにデーラマンの諸遺跡とキャルラズ、タ
 ッペ・ジャラリエの土器に関しては実見することが可能
 であったため、これらに対しては器形以外の属性に関しても
 さまざまに分類することができた。同様の観点からの分類
 は、デーラマンの諸遺跡出土資料に関しては三宅俊成氏が
 既に行っている。三宅氏は色調、胎土、ミガキの有無で 4



18ゴブレット、19形象土器、20土偶、21蓋形土器、22甕形土器

(1, 2, 4~8, 11, 12, 16, 22: 江上他編1965より一部改変; 14, 15: Fukai et al. 1978より一部改変; 3, 9, 17, 21: Ohtsu et al. 2006より一部改変;

20: Ohtsu et al. 2005より一部改変; 10, 13, 18, 19: Negahban 1996より一部改変)

(縮尺不同)

図 2 器形分類

表 1 土器タイプ分類

土器タイプ	色調	胎土	器面調整	器形
黒褐色精製土器	黒褐色	黒褐色：緻密	ミガキ、ヘラナデ	長頸壺、長胴壺
黒褐色土器	黒褐色	黒褐色～暗褐色：0.5～2mmの砂粒を含む	ヘラナデ+ナデ	深鉢類、長頸壺
暗赤褐色土器	暗赤褐色	黒褐色～暗褐色、鈍褐色～灰褐色：0.5～2mmの砂粒を含む	ヘラナデ、ヘラナデ+ナデ、ナデ	深鉢類、長頸壺
赤褐色土器	赤褐色	黒褐色～暗赤褐色：0.5～1mmの砂粒を含む	ヘラナデ+ナデ、ナデ+ケズリ	深鉢類、長頸壺
鈍褐色精製土器	鈍褐色	鈍褐色～灰褐色：良質	ヘラナデ	長頸壺
鈍褐色土器	鈍褐色	鈍褐色～灰褐色：0.5～1mmの砂粒を含む	ナデ、ヘラナデ+ナデ	短頸壺
鈍褐色粗製土器	鈍褐色	鈍褐色～灰褐色：0.5～2mmの砂粒を含む	ナデ、ナデ+ケズリ、ナデ+ヘラナデ	
明赤褐色精製土器	明赤褐色～橙色	明赤褐色：緻密	ミガキ、ヘラナデ	皿類、鉢類、長頸壺

種類に分類している(三宅 1976: 298-304)。本分析では色調、胎土を三宅氏よりも細分し、ミガキ以外の調整にも着目した。その結果、特定の器面調整は特定の胎土にしか伴わないなど、諸属性にある程度の相関関係がみられ、それによって黒褐色精製土器、黒褐色土器、暗赤褐色土器、赤褐色土器、鈍褐色精製土器、鈍褐色土器、鈍褐色粗製土器、明赤褐色精製土器という8種類に分類することが可能であった。三宅氏の分類よりも更に細分することができたことになる。このまとまりを土器の「タイプ」と称することにする。また、器形は土器タイプを導く際には分類基準とはしていないものの、結果的にそれぞれのタイプにはそのタイプでしか見られない器形というのが存在するので、そういった場合は適宜記載することにする。

(3) 編年

イランの鉄器時代は、イラン西北部のハッサンルー遺跡の層序を基に、基本的にⅠ期からⅢ期までの3時期に区分されている(Dyson 1965; 1989; Young 1969)。一方、当該地域に関しては、デーラマン盆地の出土資料を中心に時期区分が行われてきた(江上他編 1965; 江上他編 1966; 曾野他編 1968; 深井他編 1971; 三宅 1976; Haerinck 1988)。しかしそれらは相互に矛盾する部分があったり、既存の3時期区分との対応が明示されていなかったりといった問題点があった。そんな中、近年、タッペ・ジャラリエ出土資料をもとにそれらの再検討が行われた(足立 2004)。更に、未報告資料も含めたデーラマン出土資料については独自に時期区分が行われ、ハッサンルーの3時期区分との対応関係も明らかにされている(有松 2005; 西秋他 2006)。また、キャラズ出土資料に関しても実見した知見に基づき、デーラマン出土資料との対応関係から年代的位置付けが明示されている(Ohtsu et al. 2006: 46-49)。その他の諸遺跡の出土資料に関しては報告書中で年代が明示されていない場合が多かったため、実測図や写真をもとに独自にハッサンルーの3時期区分への位置づけを行った。

よって、以下の分析中での鉄器時代Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期というのは基本的にハッサンルーの3時期区分に対応するものであるが、実質的にはデーラマンにおける土器編年を中心として諸遺跡の出土資料を年代付けたことになる。このことは同時に、上記のような年代的位置付けが不明瞭であった資料に関してはその位置付けを明確にするという意味もあると考えられる。

2. 地理的単位ごとの土器組成

以下、単位地域ごとに上述した土器分類に基づいて鉄器時代各期の土器組成と土器組成の特徴、その変化を記述する。

(1) セフィード・ルード川東岸

ここで対象となる遺跡はマールリークとラーメ・ザミンである。同じセフィード・ルード川東岸に位置するといってもマールリークはラーメ・ザミンより上流のかなり高い台地上にあり、眼下にはセフィード・ルード川とその流域のかなり広い部分を見ることができる。一方、ラーメ・ザミンはセフィード・ルード東岸からはやや離れており、丘陵にやや入り込んだ山がちなところにある。そこに至るとセフィード・ルードを望むことはできず、視界は開けていない。

a. 鉄器時代Ⅰ期

この時期に関してはマールリーク、アリ・キャラム・バーク及びラーメ・ザミンで墓が確認されている。ただし、アリ・キャラム・バークでは当該期と判断される土器がわずかであるため、本稿では特に触れない。

マールリークの土器組成は鉢類と深鉢類、壺類が多く見られ、加えて盤形土器(Negahban 1996: Fig. 29-619 ~ 622)、ゴブレット(同: Fig. 22-547)、形象土器(同: Fig. 13-84 ~ 99, Fig. 14-106, 113)、土偶(同: Fig. 11-70 ~ 74, Fig. 12-76)などがある。壺類には細頸壺(同: Fig. 17-505, 506, Fig. 18, Fig. 19)と太頸壺(同: Fig. 17-495 ~ 497, Fig. 20, Fig. 21-530)双方があり、細頸壺が主流である。さらに短頸壺(同: Fig. 24-562 ~ 567)と無頸壺(同: Fig. 25-572, 573, 575, 577, 579)がみられる。細頸壺は胴部が長楕円形あるいは球形で、球形の場合肩部がやや張りだしているのが特徴である。すべてに頸部下半以下から肩部にかけて把手が取り付けられ、肩部に列点文が、頸部に畝状貼付文がしばしば施される。太頸壺にもほとんどすべてに把手が付き、肩部に格子状暗文や列点文が施される。短頸壺は丸底のものや平底のもの両方がある。無頸壺は大型で、注口が付く。鉢類は大型で半円球を呈し口縁部に暗文が施されるもの(同: Fig. 26-585, 586)や、小型のものには注口あるいは片口の付くものがある(同: Fig. 28-607)。深鉢類は底部から口縁にかけて緩やかに湾曲し、嘴形の注口が付くものがほとんどである(同: Fig. 28-608)。報告書の記述によればこの時期のほとんどの土器が黒褐色精製土器か黒褐色土器であるようだ。さらに、多く出土するコブウシ形の形象土器(同: Fig. 13)は現在にいたるまでマールリークからしか出土していない。また、土偶が多く出土することも特徴である。

ラーメ・ザミンの土器組成はマールリークとは大きく異なる。ここでの土器組成は壺類、鉢類に限られている。マールリークで特徴的であった盤形土器や形象土器、土偶などはない。壺類でも短頸壺(Fukai et al. 1978: PL56-4, 7, PL57-4, PL58-3, 4, PL59-3, PL63-1)と小型の長胴壺(同:

PL59-5, PL63-6, 7) が多く、その他には太頸壺 (同: PL57-2, PL58-1, PL62-4・5) と細頸壺 (同: PL56-3, PL57-3, PL59-1, PL62-1)、無頸壺 (同: PL58-5) があるが、いずれもマールリークのような装飾はみられない。さらに、ラーメ・ザミーンでは鉢のなかでも口縁が「く」の字形に屈曲した大型鉢 (同: PL57-5, PL59-2, 4, PL62-5, 7, PL63-4) や、底部から口縁まで器壁が直線的にのびる鉢 (同: PL57-1, PL62-3, PL63-3) などが多く見られるが、こうしたものはマールリークには存在しない。しかし一方で、注口付無頸壺が存在したり (同: PL58-5)、鉢類には片口付きのものがあるなど (同: PL56-9, PL58-2)、マールリークの土器組成と共通する点もある。

b. 鉄器時代Ⅱ期

この時期の墓はマールリークとゲシュラグで確認されている。

マールリークで鉄器時代Ⅱ期と断定しうる土器はブリッジ状の嘴形注口を持つ平底短頸壺 (Negahban 1996: Fig. 25-578) のみである。マールリークでは墓壙内で追葬が行われており、複数の時期の遺物が同一の墓壙内で確認されているが、報告書ではそれらの区分が成されていないので、確実に鉄器時代Ⅱ期と判断しうる遺物と共伴する他の遺物は不明である。ただ、この嘴形注口付平底短頸壺は鉄器時代Ⅰ期に多く見られる嘴形注口付深鉢や鉢、無頸壺と同系統と考えられるので、マールリークにおいては少なくともこうした特徴的な属性に関しては鉄器時代Ⅰ期からⅡ期にかけて断絶はしないようである。

ゲシュラグでも同様の嘴形注口付平底短頸壺が出土している (同: Plate. 110-582)。また、双把手付平底短頸壺も出土している (Fig. 24-571)。

c. 鉄器時代Ⅲ期

この時期の墓はマールリークの一部とゼイナブ・ベジャールで確認されている。

マールリークでの土器組成は皿類、鉢類、壺類で構成されている。壺類は細頸壺のみになり、胴部が球形のものも肩部は張らず、ほぼ球形になる (同: Pl. 103-522)。皿類は外面の口縁部分を面取りし、口縁が三角形を呈するもの (同: Pl. 111-595, Pl. 112-602) が特徴的である。鉢類は片口を有するもの (同: Pl. 112-606) が相変わらずみられるが、大型のものは姿を消す。

ゼイナブ・ベジャールからは胴部は洋梨形の細頸壺が出土している (Negahban 1996: Pl. 101-499)。これも、この時期に特徴的な器形である。ゼイナブ・ベジャールからは更に皿類も1点出土しているが、器形の詳細が不明なため、ここでは触れない。

(2) セフィード・ルード川西岸

ここで対象となる遺跡はキャルーラズ、タッペ・ジャラリエ、ジャムシード・アーバードである。キャルーラズは1960年代にイラン人の研究者によって発掘調査がおこなわれ、その遺物の豊富さから当該地域においてきわめて重要な遺跡であるということは知られていたが、ほとんどの遺物が未報告であったため、多くが不明なままであった (Hakemi 1968; 1973)。今回、土器の把握はできたものの、その共伴関係や墓壙の詳細などは不明なままである。タッペ・ジャラリエはキャルーラズの居住区として考えられている。ジャムシード・アーバードでは5基の墓壙が発掘されたにすぎないが、この遺跡はキャルーラズより下流に位置しており、セフィード・ルード川下流東岸で発掘されたはじめての遺跡である。

ただし、上述したようにタッペ・ジャラリエのみ遺構の性格が異なるため、そのコンテキストの違いに因る土器の相違を土器の地域性に加味してしまう恐れがある。よって、ジャラリエ出土資料に関しては、他の2遺跡と共通する資料が存在した場合それのみを補完的に取り上げるにとどめる。また、キャルーラズ及びタッペ・ジャラリエに関しては出土資料の実見が可能であったため、土器のタイプに関しても言及したい。

a. 鉄器時代Ⅰ期

この時期の墓が確認されているのはジャムシード・アーバードとキャルーラズである。

ジャムシード・アーバードの土器組成は盤形土器、鉢類、深鉢類、長頸壺、短頸壺、長胴壺、土偶からなる。盤形土器 (Fallahiyan 2004: 230-12) と土偶 (同: 230-17) は各1点のみの出土で、鉢類 (同: 230-11)、深鉢類 (同: 231-20, 21)、壺類 (同: 230-6 ~ 10) が土器組成のなかで主流である。ジャムシード・アーバードの土器に関しては、報告者はガレクティⅠ号丘やラーメ・ザミーン出土土器との類似を指摘しているが、土偶が存在することや、深鉢でも注口付のものがほとんどであること、壺類も長楕円形の胴部をもつ細頸壺 (同: 230-6, 7, 10) が主流で、注口付無頸壺 (同: 231-18, 19) が存在することなどを考慮すると、土器組成はあきらかにセフィード・ルード川東岸域、特にマールリークの土器組成の特徴と類似する。

キャルーラズでこの時期のものとして比定し得るのは主に壺類で、なかでも長胴壺と長頸壺は黒褐色精製土器である (図4-1)。

b. 鉄器時代Ⅱ期

この地域における該期の遺跡は不明である。しかしながら、この時期の土器アセンブリッジ自体が明確になってい

ないので、それが定義されさえすれば、キャルーラズやタッペ・ジャラリエにこの時期の遺物が含まれると判定される可能性もある。実際そうした報告もなされている (Fahimi 2005: 46)。しかし、現時点の編年に照らし合わせた限りではそのように積極的に判断できる資料はないと考えられるため、本稿では扱わない。

c. 鉄器時代Ⅲ期

この時期の墓が確認されているのはキャルーラズである。タッペ・ジャラリエもこの時期に属する。ただ、上述したようにタッペ・ジャラリエは他の遺跡と遺構の性格が異なるので、キャルーラズの遺物を中心に記述し、タッペ・ジャラリエ出土資料に関しては補足的に用いる。

この時期のキャルーラズの土器組成は皿類、鉢類、壺類である。壺類もほとんどが細頸壺か長胴壺 (図 6-5, 6, 8) で、大型の長頸壺などは姿を消す。特に、この時期の鉢及び皿では口縁部断面が三角形を呈するもの (Adachi 2005: 69-70) が特徴的である (図 6-2)。こうした特長を有する口縁部片はタッペ・ジャラリエでも多く出土している (Ohtsu et al. 2005: Fig. 42)。このような皿や鉢、壺は把手を有する場合が多いが、把手では断面三角形の、明瞭な稜を有したものが新たに出現する (図 6-2)。鉢 (図 6-4) は片口を有するもので、口唇部が平坦である (Adachi 2005: 69)。この口唇もタッペ・ジャラリエで多くみられるものである (Ohtsu et al. 2005: Fig. 41)。細頸壺は胴部球形で、注口がつくものが多い (図 6-5, 6)。刻文が多用されるのも該期からの特徴である (図 6-3, 5, 6)。土器タイプでは、この時期から出現した明褐色精製土器が多く見られるようになるのが特徴である。

(3) チャーク・ルード川流域

ここで対象となる遺跡はデーラマン盆地で発掘調査が行われたガレクティⅠ号丘、ガレクティⅡ号丘、ラスルカンの3遺跡である。

a. 鉄器時代Ⅰ期

この時期の墓が確認されているのはガレクティⅠ号丘とラスルカンである。

ここでの土器組成は鉢類、深鉢類、壺類、埴類、盤形土器 (江上編 1965: PL. LII-25, PL. LXII-19, PL. LXXIX-208, PL. LXXXI-19) からなる。これらのうち多くみられるのは鉢類と壺類で、ほとんどすべての墓に副葬されている。鉢類で特徴的なのは口縁が「く」の字形に屈曲した大型鉢で、複数個収められている墓もあった (江上編 1965: PL. XLIII-19, PL. XLV-7, 8, PL. XLVII-7, PL. LII-20 ~ 23, PL. LXII-17, PL. LXIV-21, 22, PL. LXXIX-204, 205, PL.

LXXXI-22, PL. LXXXIII-8 ~ 11, PL. LXXXVIII-2, PL. LXXXIX-5; 深井・池田編 1971: PL. XLVIII-2, PL. LIV-2, 5, 8, PL. LVI-1, PL. LVII-3)。また、半球形の高台付鉢も見られる (江上編 1965: PL. XLIII-17, PL. XLVII-3, PL. LXII-13; 深井・池田編 1971: PL. LV-4, PL. LVI-2)。壺類では丸底短頸壺が主である (江上編 1965: PL. XLV-5, PL. XLVII-1, PL. LIII-29 ~ 34, PL. LIX-5, PL. LXII-15, PL. LXIV-25, PL. LXXXVIII-4, PL. LXXXIX-3; 深井・池田編 1971: PL. XLVIII-1, PL. LV-1)。長頸壺はほとんどが太頸壺で、肩部に刻文や暗文が施されるものがある (江上編 1965: PL. LIX-2, PL. LXVI-15, PL. LXXIX-206)。また、長胴壺は小型のもの (江上編 1965: PL. LIII-26, 27; 深井・池田編 1971: PL. LI-12) から大型のもの (江上編 1965: PL. LXII-18, PL. LXXXI-23) まである。深鉢類では器壁が凹状に内湾するもの (江上編 1965: PL. XLVIII-33) から底部から口縁にかけて湾曲するもの (江上編 1965: PL. LXXIX-202) まであるが、片口はみられるものの、注口が付くのは少数である (江上編 1965: PL. XLVIII-35)。埴類には把手が付く (江上編 1965: PL. LIII-28; 深井・池田編 1971: PL. LI-14)。土器タイプでは黒褐色精製土器は少数で、嚢形注口付深鉢と長頸壺といった器形のみがこれにあてはまる。そもそも、胎土が精製のものはごく一部である。多くは黒褐色土器で、鈍褐色土器、赤褐色土器、鈍褐色粗製土器の順に割合が低くなる (図 3)。

b. 鉄器時代Ⅱ期

この時期の墓が存在するのはガレクティⅡ号丘のみである。土器組成は壺類と鉢類からなる。壺類は把手付平底短

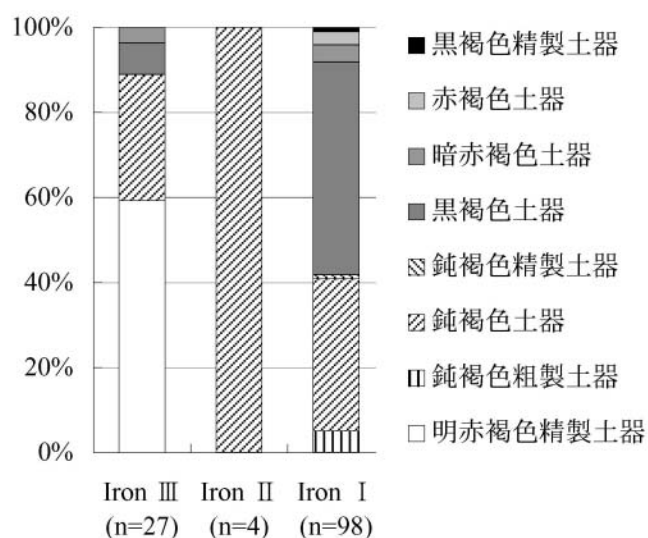


図3 ガレクティⅠ号丘及びⅡ号丘における鉄器時代の土器タイプの変遷

頸壺（深井・池田編 1971: PL. XLIV-4, 5）と太頸長頸壺（同: PL. XLIV-9, 10）で、長頸壺では上部に突起がある把手と注口が付き、把手下部や注口直下に貼付文が施されるようになることが該期の特徴である。鉢類（同: PL. XLIV-13）では鉄器時代Ⅰ期にみられた大型のものが姿を消す。

ここでは土器タイプのうち鈍褐色土器が主流になる（図3）。土器タイプの変化を考慮した場合、鉄器時代Ⅰ期からⅡ期にかけての土器の変化はあくまで漸移的であると考えられる。なぜなら、土器組成から鉄器時代Ⅰ期と考えられる墓であっても、1つの墓墳内の副葬品の中で黒褐色系土器が主流である墓と鈍褐色土器が主流である墓とが明確に区分され、器形における型式変化を考慮すると、鈍褐色土器が主流である墓のほうが、黒褐色土器が主流である墓よりも後の時代に位置づけられると考えられるためである。

c. 鉄器時代Ⅲ期

該期の墓が確認されているのはガレクティⅠ号丘である。土器組成は皿類、壺類、碗類、蓋形土器からなり、壺類と皿類が大部分を占める。壺類では細頸壺が多く、胴部球形で（江上編 1965: PL. LXXIII-2）、注口がつくもの（江上編 1965: PL. LXVI-9, PL. LXXIII-4～7, 9）が多い。胴部が洋梨形のもの（同: PL. LXXIII-1, 3）や、小型長胴壺（同: PL. LXVI-7, PL. LXXIII-10）もみられる。皿類や鉢類では、Triangle Rimがこの時期から出現する（同: PL. LI-1～3, PL. LXVI-12～1）。こうした皿や壺は把手を有する場合が多いが、把手も断面三角形の、明瞭な稜を有したもの（同: PL. LXVI-1, PL. LXXIII-2）や輪状把手（同: PL. LXVI-14）が新たに出てくる。ディスク・ベースもみられる（同: PL. LI-2, PL. LXVI-10, 13）。刻文が多用されるのも該期からの特徴である。

土器タイプではこの時期から出現した明赤褐色精製土器が主流になる。その他では鈍褐色土器、赤褐色土器の順に割合が低くなる（図3）。

2. 土器動態と主要遺跡間の比較

ここでは地理的単位ごとの土器組成及び土器タイプを比較し、葬送慣習から見た地域性がどのように変化していったのか、地域間のやりとりとそれが地理的単位とどのように関連していたのかということを、時期ごとに見ていきたいと思う。また、そうしたことの性格を理解しやすくするために、時期ごとに、とりわけ大規模に利用されていたと考えられる遺跡については副葬品として用いられた土器以外の要素も取り上げてみたい。

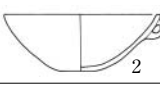
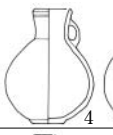
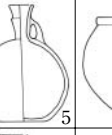
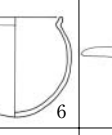
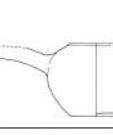
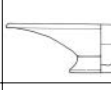
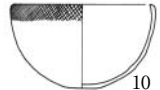
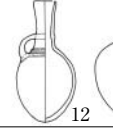
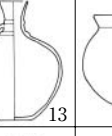
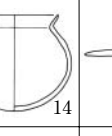
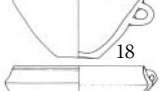
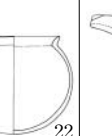
(1) 鉄器時代Ⅰ期（図4）

土器組成をもとに区分した場合、鉢類と深鉢類、壺類を

中心に盤形土器、ゴブレット、形象土器、土偶を有するマールリーク及びジャムシード・アーバードと、鉢類、深鉢類、壺類を中心として碗類、盤形土器を有するガレクティⅠ号丘、ラスルカンなどのデーラマンの諸遺跡というようにまとまりを見出すことができる。中心となる土器類は一見ある程度共通しているが、各土器類を構成する器形の特徴は異なることが分かる。鉢類ではデーラマンでは口縁が「く」の字形に屈曲する大型鉢が特徴であるが、この鉢はマールリークでは1点も出土していない。マールリークの場合、半球形のものや大きく湾曲して胴部下半に把手が付くものが中心である。また、同じ半球形の鉢でもガレクティⅠ号丘のように高台が付くものもマールリークでは出土していない。深鉢類ではマールリークでは嘴形注口付土器が多く、様々な種類がみられるが、デーラマンでは限られた種類のものが出土するのみである。壺類でもマールリークで多く見られる胴部長楕円あるいは肩部が張った細頸壺や嘴形注口付無頸壺はデーラマンでは1点も出土しない一方、デーラマンで一般的に見られる丸底短頸壺はマールリークでは少数である。さらに、マールリークでは多く出土する形象土器や土偶がデーラマンでは1点も出土しないという点も大きな差異である。

こうした双方の特徴を考慮すると、口縁が「く」の字形に屈曲する大型鉢や丸底短頸壺を多く有するラーム・ザミーンはデーラマンを中心としたまとまりに属するということになる。よって、土器組成を基準とした場合、当該地域は、クーヘ・ダルファク山を挟んで、セフィード・ルード川西岸まで包括するセフィード・ルード川東岸のマールリークを中心としたまとまりと、デーラマンのガレクティⅠ号丘を中心としたチャーク・ルード川流域のまとまりというように、2つのまとまりに大別することができる。

一方、この時期、各地理的単位すべてに共通して見られる器形も存在する。それは盤形土器、深鉢である。この両者は土器組成を異にするマールリークとガレクティⅠ号丘でも共通してみられる器形であり、盤形土器は両遺跡で複数個出土しているし、嘴形注口付土器の中には、比較すると、一方からもう一方へ搬入されたと考えられるほど、器形が一致するものもある（Negahban 1996: Fig. 30-632; 江上編 1965: Pl. LII-17）。また、ガレクティⅠ号丘の土器タイプは基本的に黒褐色土器であるが、少数ながら黒褐色精製土器（江上編 1965: PL. LIX-2）および鈍褐色精製土器（深井・池田編 1971: PL. LI-15）が存在する。それらの器形はともに長頸壺であるが、これらは調整、胎土、装飾などがガレクティⅠ号丘から出土する同時期の土器とは全く異なり且つ少数であるため、その他の土器とは出自を異にするのではないかと考えられる。そこで器形を比較してみると、これらも器形がマールリーク出土のものと一致する

	鉢類	深鉢類	壺類				その他
			長頸壺	短頸壺	無頸壺	長胴壺	
KALURAZ							
JAMSID ABAD							
MARLIK							
LAMEH ZAMIN							
GHALEKUTI I							
LASULKAN							

(Kaluraz出土土器: Ohtsu et al. 2006より; Jamsid Abad出土土器: Fallahiyan 2004より一部改変; Marlik出土土器: Negahban 1996より一部改変; Lameh Zamin出土土器: Fukai et al. 1978より; Ghalekuti I及びLasulkan出土土器: 江上他編1965より)

図4 鉄器時代I期の土器組成

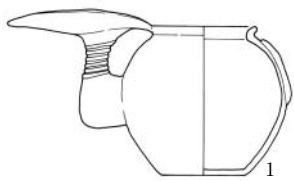
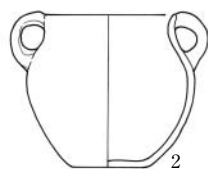
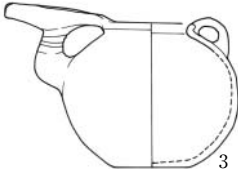
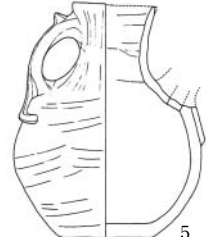
(Negahban 1996: Pl. 104-529, 530, 528)。このうち黒褐色精製土器の長頸壺は同様のものがキャルラズでも出土している(図4-1)。キャルラズとデーラマンのこの長頸壺を比較した場合、器形の細部をはじめ胎土や製作技法の細かい点まですべてが共通する。また、黒褐色土器のなかでも肩部に格子状暗文が施される長頸壺もマールリークとデーラマンでもともに出土する器形である。

そこで、双方の物質文化の違いをより明確にするために、この2つのまとまりのそれぞれでこの時期とりわけ大規模に利用されていたと考えられるマールリークとガレクティI号丘について土器以外の点でも比較してみたい。

マールリークは墓が53基発掘されており、多くは板石を丁寧に積み上げた竪穴式石槨墓で、さらに馬の埋葬に伴うなど、この時期においては当該地域で最も大規模な墓地であったことは間違いない。また、規模だけでなく、その副葬品に関しても他を圧倒する質と量を誇っている。コブウシを模した形象土器は現時点では中近東でマールリーク

からしか検出されていないものであるし、土偶も10点近く出土している。また、マールリークから出土する土器にはアルボルズ山脈を越えてより南東部に位置するシアルク(Sialk)などと類似するものが多く含まれる。それは貴金属製品になるとさらに顕著であり、シアルクはいうまでもなく、ザグロス山脈の諸遺跡やウルミエ(Urmia)湖周辺の諸遺跡とも共通するものを有している。そして、少なくともその物質文化はセフィード・ルード川の対岸には広がっており、ジャムシード・アーバードでは副葬品の土器組成の大部分がマールリークと一致するし、土偶も一点のみだが副葬されていた。ただし、そうした葬送慣習は共有しながらも、その他の貴金属製品はジャムシード・アーバードでは格段に少なく、青銅製利器が数点検出されたに過ぎない。また、墓壙も単純な土壙墓で、マールリークとの間に明確な格差が存在したことが推測されるのである。

デーラマンの、特にガレクティI号丘のA区ではV号墓を中心に据えて複数の墓壙が規則正しく造られている。

	鉢類	壺類	
		長頸壺	短頸壺
MARLIK			
GHESHLAGH			 
GHALEKUTI II			

(Marlik及びGheslagh出土土器: Negahban 1996より; Ghalekuti II 出土土器: 深井他編 1971より) (縮尺不同)

図5 鉄器時代Ⅱ期の土器組成

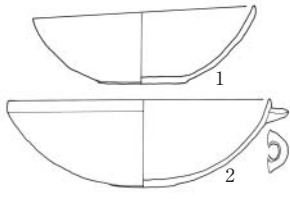
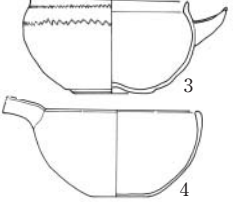
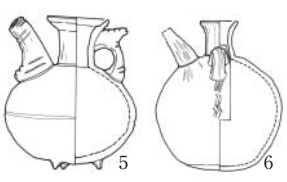
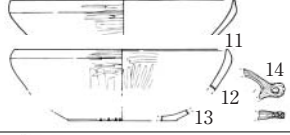
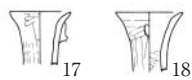
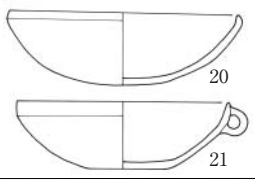
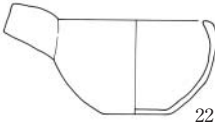
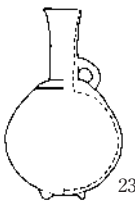
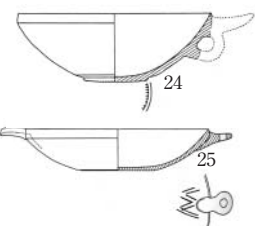
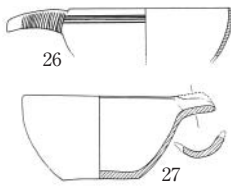
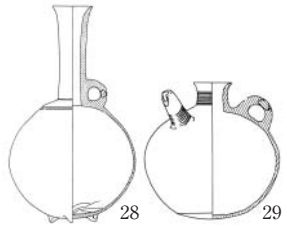
こうした墓域構成はマールリークはじめ同時期の他の遺跡では確認されていない。その墓域構成から、この時期この地域に「首長制」が存在し、V号墓被葬者が「首長」なのではないかと推測されている (Cinquabre 1978)。確かにV号墓は他の墓とは墓域規模や副葬品の種類と量は他の墓とくらべて際立っており、被葬者の埋葬姿勢や墓域の構造も異なっている。加えて興味深いのは、この被葬者の独特の埋葬姿勢に関してコーカサスや黒海沿岸との類似が指摘されていることである (江上 1965: 45; 千代延 2000: 35)。また、デーラマンはじめトマジヤン (Tomadjan) などチャーク・ルード川流域でのみ特徴的に出土する青銅剣もまたアゼルバイジャンやコーカサスとの類似が指摘されている (Medvedskaya 1982: 75)。こうしたことから、デーラマンを中心としたチャーク・ルード川流域に墓地を形成した集団は北方との文化的つながりが強い人々であったと考えられる。

以上より、鉄器時代Ⅰ期を土器組成で大まかに区分した場合、嘴形注口付深鉢や細頸壺、嘴形注口付無頸壺、形象土器、土偶を特徴とする土器組成のグループと、大型鉢、丸底短頸壺を中心とするグループとに大別することができ、前者はマールリーク、すなわちセフィード・ルード川東岸を中心としてセフィード・ルード川両岸に、後者はチャーク・ルード川流域を中心として一部セフィード・ルー

ド川下流東岸にも広がるということが明らかになった。また、両者はクーヘ・ダルファク山を挟んで片やその西部に広がり、片やその北部から東部にかけて広がっている、ということも指摘できる。よって、土器組成からみたまとまりと地理的単位とは大まかには一致していると考えて良いだろう。また、双方の中心的な遺跡の比較から、副葬品に収める土器組成以外でも葬送慣習が異なっていた可能性も指摘できる。一方で、両者の間ではいくつかの器形に関しては共通しており、さらに一部他方から他方へ搬入されたと考え得るものもあるので、なんらかのやりとりは存在したと考えられる。

(2) 鉄器時代Ⅱ期 (図5)

この時期のものと断定できる資料は少なく、したがって、土器組成と称し得るものを提示することは困難であるが、少なくとも該期と断定しうるような特徴的な土器を比較した場合、大きく2つのまとまりを見出すことが可能である。ブリッジ状嘴形注口付短頸壺を有するマールリーク及びゲシュラーグと、貼付文が多用される把手付平底短頸壺と長頸壺が中心となるガレクティⅡ号丘である。また、特徴的な器形が共通しないのみならず、鉄器時代Ⅰ期でみられたような、双方に共通する器形や、搬入されたと考えられるような土器も見出すことはできない。また、鉄器時代Ⅰ期

	皿類	鉢類	壺類			その他
			長頸壺	無頸壺	長胴壺	
KALURAZ						
TAPPE JALALIYE						
MARLIK						
ZEINAB BEJAR						
GHALEKUTI I						

(Kaluraz出土土器: Ohtsu et al. 2006より; Marlik及びZeinab Bejar出土土器: Negahban 1996より
; Tappe Jalaliye出土土器: Ohtsu et al. 2005より; Ghalekuti I出土土器: 江上他編1965より)

(縮尺不同)

図6 鉄器時代Ⅲ期の土器組成

に地理的単位をやや越えて広がっていたジャムシード・アーバードやラーメ・ザミンは該期まで継続しない。こうしたことから、たいへん限られているが現在得られている資料から判断した場合、該期は鉄器時代Ⅰ期と比べれば、土器の地域性が高まった時期であるといえよう。

また、この時期、前時期とくらべるとそれまで大規模に利用されていたマールリークの規模は縮小し、ガレクティⅠ号丘は分かっている限りでは利用されなくなるようである。そうしたことから、この時期に地域社会で何らかの変化が生じたということは推測できる。

(3) 鉄器時代Ⅲ期 (図6)

該期の土器組成を比較すると、基本的な土器組成はすべての地理的単位で共通することが指摘できる。地理的単位

を越えて共通するのは皿類、壺類で、これらはいずれの地域でも土器組成のなかで主流をなす。そして、細かな器形の特徴も一致するものが多い。壺類では胴部球形あるいは洋梨形の細頸壺、長胴壺で、胴部球形のものには注口が付く場合が多い。また、皿類では口縁で断面が三角形を呈するものがどの地域でもみられる。

さらに、大まかな器形のみならず、口縁や底部、把手、装飾の特徴や土器タイプまで一致することが大きな特徴である。上述したような、口縁部断面が三角形を呈する皿類や鉢類、断面三角形の明瞭な稜を有した把手、ディスク・ベースと称される造り出しによる底部、刻文や、底部や把手の縁の刻み目が多用されるのといった特性は、該期から出現し、地理的単位を越えて共通する。土器タイプではこの時期から出現した明赤褐色精製土器が主流になり、特徴

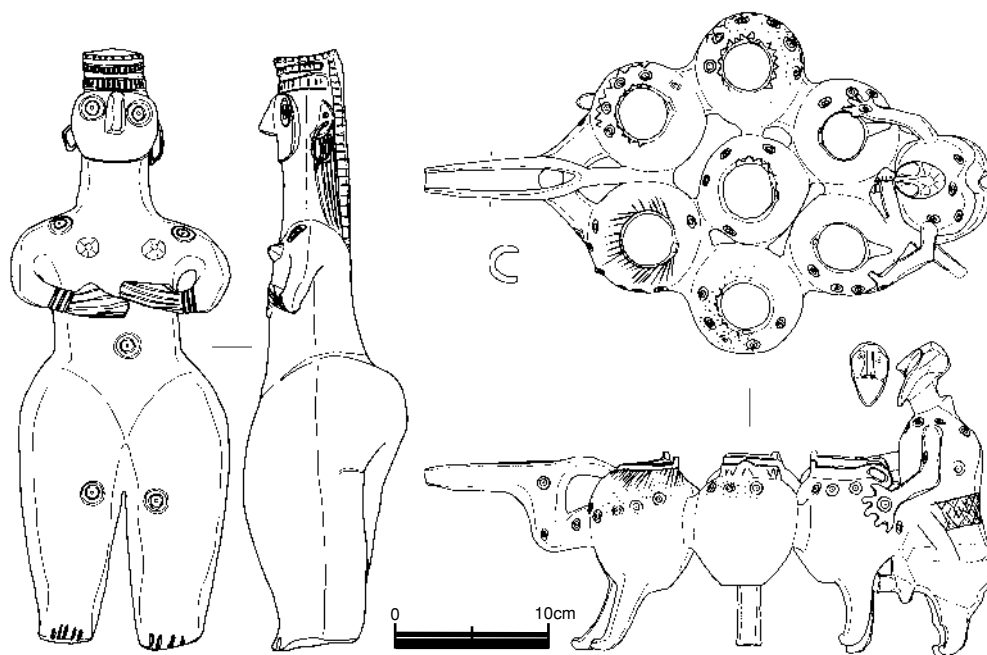


図7 キャルーラズ出土土偶及び形象土器 (Ohtsu et al. 2006: Fig. 4. 46, Fig. 5. 47)

的なミガキも各地域で共通してみられる。

一方で、やはり地域ごとの特徴も存在する。胴部洋梨形の細頸壺はデーラマンとマールリークのみでセフィード・ルード川西岸では確認されていない。片や口唇部平坦口縁はキャルーラズと特にタッペ・ジャラリエ (Ohtsu et al. 2005 : Fig. 41) に多く見られ、あとはわずかにマールリークで確認されるのみである。蓋形土器はキャルーラズ (図6-9) とデーラマン (江上編 1965: PL. LXVI-4) で出土している。また、キャルーラズでは他の遺跡に比べて装飾が格段に精緻で、且つ多くの土器にみられる。しかし、これらの土器も土器タイプでいえば明赤褐色精製土器にあたり、また、基本的な土器組成の範疇での違いではある。

こうしたなかで、キャルーラズに関しては他の遺跡とは多少異なった点が見られる。キャルーラズから出土するような大型且精緻な土偶類 (図7) は他の遺跡からは出土しておらず、また、土器も他の遺跡と比較して全般に装飾的要素が強い (図6-3, 5, 7)

また、キャルーラズ出土のものと酷似する土偶 (大津他 2006: 95) が出土したタッペ・ジャラリエは、タッペと称されていることからわかるとおり、当該地域では極めてめずらしいタッペ状の遺跡である。それまでの遺跡のほとんどが墓地か、平地上に立地するもののみであったことを考えると、このタッペ状遺跡の出現は当該地域においていろいろな意味で画期的な出来事であったといえよう。また、タッペ・ジャラリエはその立地や規模からキャルー

ラズ溪谷の拠点であったとも推定されている (山内 2006: 27)。さらに金属の精錬や土器の生産を行っていた可能性から、経済的に繁栄していたとも考えられている (同: 28)。そうしたことから、セフィード・ルード川西岸、特にタッペ・ジャラリエに居住した人々がこの時期当該地域において何らかの中心的役割を担っていたと推測することも可能ではないだろうか。

以上より、鉄器時代Ⅲ期にはこの時期から新たに出現したタッペ・ジャラリエという遺跡を中心に、セフィード・ルード流域ばかりでなく、それまでは障壁となっていたと考えられるクーヘ・ダルファク山を越えて、チャーク・ルード川流域でも、土器組成のみならずタイプも共通した土器の副葬が行われるようになったのではないかと推測することができる。

Ⅳ. 葬送慣習からみた地域性とその変容 (図8)

鉄器時代Ⅰ期では、大まかにいえばクーヘ・ダルファク山の西部と北東部といったようにセフィード・ルード川やチャーク・ルード川といった地理的単位ごとにそれぞれ異なった土器組成が展開する。しかし、いくつかの器形に関してはすべての地理的単位で共通してみられるし、他方から他方へ搬入されたと考えられる土器もあり、相互のやり取りが行われた痕跡はある。よって、鉄器時代Ⅰ期は、基本的にはクーヘ・ダルファク山の西と北東で、セフィード・ルード川東岸のマールリークを中心とする地域とチャ

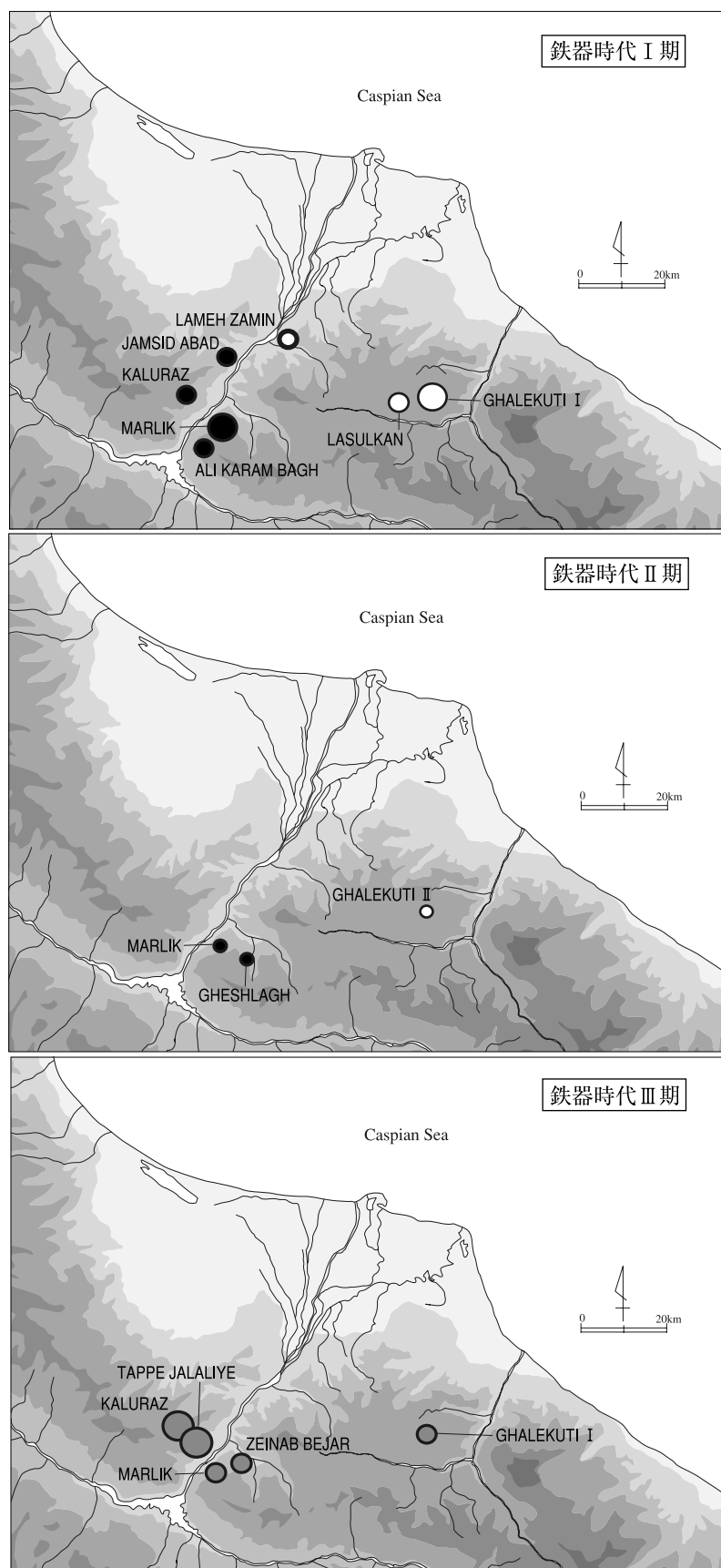


図8 鉄器時代のカスピ海南西岸域における埋葬慣習からみた地域性の変化

ーク・ルード川流域の「首長制」を有していた地域とが葬送慣習を異にしながらも双方の中心勢力間では一部情報のやり取りをしながら並存していた時期として位置づけられる。

鉄器時代Ⅱ期になるとそうした様相が変化をみせる。まず、セフィード・ルード川西岸ではジャムシード・アーバードが、東岸でもラーメ・ザミーンが利用されなくなる。チャーク・ルード川流域でもそれまで「首長」の墓を有していたガレクティⅠ号丘は利用されなくなり、Ⅴ号墓のような卓越した墓は営まれなくなる。規則的な墓域構成も姿を消す。一見すると該期に当該地域が衰退に向かっていったようだが、そう判断するのは早計であろう。なぜなら1つは、従来中心的であった遺跡の規模が縮小する一方で、例えばガレクティⅡ号丘などのように該期から出現する遺跡があること、2つ目は、マールリークは規模が縮小するものの継続し、前時期とかわらず他地域との交流は盛んであるということである。それはウルミエ湖周辺やアルボルズ山脈と共通する土器が存在することからもわかる。しかし一方で全体的に遺跡が消滅、その規模が縮小するといった傾向がみられるのは確かであり、マールリークが外部の土器を受け入れる一方で、地域内では土器の地域性が高まり、しかも土器が粗製になるといった現象がみられることも事実である。また、該期の様相は前後の時期と比べても非常にとらえにくいままであり、その要因は、上述したように、当該地域において該期の土器組成が十分把握されていないことにある。換言すれば、そのような、とらえにくい、地域性のきわめて高い物質文化を有しているということが該期の特性であるとはいえよう。鉄器時代Ⅱ期では、土器組成を導くこと自体が困難であるが、すくなくとも複数の地理的単位に共通してみられる器形はなくなり、その点においては地域性が高まったといえるだろう。

それが、鉄器時代Ⅲ期になると土器の斉一性が地理的単位を越えて広がる。土器組成のみならず土器タイプについても共通するという点がこの時期の特徴である。よって、この鉄器時代Ⅲ期に当該地域ではじめて全面的に地理的単位を越えて副葬される土器が斉一化するということがいえよう。また、鉄器時代Ⅲ期になると、副葬される土器以外にも大きな変化が起こる。1つ目は、当該地域の中心地がセフィード・ルード川東岸から西岸へシフトすることである。それまで当該地域において中心的であったと考えられるマールリークではこの時期墓の数自体が減少し、近隣の遺跡に埋葬の主体が移行するが、そこでも以前のような副葬品の豊富さはすでにみられない。チャーク・ルード川流域では、前時期と比較すれば遺構は増加するものの、鉄器時代Ⅰ期のような規模では展開されないし、「首長」墓と称し得るような遺構も存在しない。一方、セフィード・ル

ード川西岸では、この時期にタッペ・ジャラリエが出現する。キャルーラズの土器と、器形のみならず胎土や製作技法まで一致した土器が単位地域を越えて広がり、墓にも積極的に副葬されることは、前時期に土器の地域性が強くなっていたことを考えると大きな変化である。また、同じ当該地域の中心といっても、鉄器時代Ⅰ期からⅡ期にかけてのマールリークや、チャーク・ルード川流域におけるガレクティⅠ号丘に見られた中心性とはまた違った性格が伺える。これらの物質文化の広がりはいくまで地理的単位を基本としていたが、該期の物質文化はそれを越えて、今までにない斉一的な文化圏を形成する性格を有していたのである。さらに、上述したように、この文化は当該地域でこれまで見られなかったタッペを形成するという性格も有していた。こうしたことから、鉄器時代を通してした場合、少なくともこの地域ではこのⅢ期が文化変容の画期であると考えることができる。

V. カスピ海南西岸域からみた鉄器時代Ⅲ期

今回の分析によって、副葬される土器の組み合わせという葬送慣習の一側面からみた鉄器時代の地域性が、地理的制約に従って分断されていた状態から均質化していくという過程が明らかになった。また、その過程で、特に鉄器時代のⅡ期からⅢ期にかけてに今までとは全く異なった性格の文化が出現することや、鉄器時代Ⅲ期の具体的な物質文化に前時期からの継続性が薄いことなどを指摘し、この時期に文化変容の画期を見出すことができるということも明らかにすることができた。

そこで、こうした変化が起こった鉄器時代Ⅲ期とはどういった時代なのかということを改めて考えてみたい。鉄器時代Ⅲ期は歴史的には最初のイラン系王朝であるメディアが登場した時期、そして、「世界帝国」と称されるアケメネス朝ペルシャが成立する直前期として位置づけられる。メディアは自身の記録は残さなかったが、より西方ではメディアに関する文献資料が残されており、そこからメディアの領域や成立過程を論ずる試みは積極的に行われている。考古学的にはこの両王朝の成立過程やその物質文化には依然不明な点が多く、特にメディアに関してはその王朝としての位置づけや存在自体に疑問が呈されることすらある (Sancisi-Weerdenburg 1985, 1987, 1994)。現に、現在メディアの遺跡として比定されているのは首都であったエクバタナ (現在のハマダーン) を含め4遺跡のみである (Curtis 1995: 23)。また、その成立過程や支配領域に関しても、文献研究の成果を合わせても諸説入り乱れているのが現状である (佐藤 1995; Genito 2005)。

こういった大きな歴史の流れと今回の分析結果を組み合わせてみた場合、こうした王朝成立史に関してどういった

ことがいえるのだろうか。それを考察することは、今回指摘した文化変容の要因を解明する一助にもなり得るとも考えられる。

そうしたことを考える際に重要なのは、今回分析の対象とした葬送慣習というものが、さまざまな慣習のなかで最も保守的なものである、と想定できる点と、今回の対象地域は政治的には一地方都市にすぎないばかりか、「辺境」とすら称される地域である、という点である。前者に関してはあくまで一般論に過ぎないが、葬送慣習というものは当時の人々の死生観やおそらくイデオロギーといったことまで反映し得るような慣習であり、それゆえに例えば利便性といったことや日常生活における雑事などには簡単には左右されないということは前提としてよいであろう。死やそれにまつわる葬送慣習は、その社会あるいは文化における最も根源的な社会的、文化的価値あるいはそれらの問題を反映している可能性が高い（メトカーフ・ハンティントン 2001: 42）。今回分析の対象としたのは副葬される土器の組み合わせであり、葬送慣習のあくまで一側面に過ぎないが、たとえ一側面であってもそうした葬送慣習の特性は反映していると考えられる。後者に関しては、特に文献史学などから指摘されることである。当該地域は非常に孤立していて（深井編 1980: 21）、どういった人々が住んでいるかすらわからない地域であり（Minorsky 1932）、また、時には独立した王国の存在が指摘されるような場合もあった（Negahban 1968: 62; Hakemi 1973: 3）。考古学的にみれば、上述したように、少なくともマールリークなどは西方やより南方の遺跡との類似点はみられ、文化的には文献から指摘されるほど孤立していたわけではないと考えられる。ただ、時期によっては個性的な物質文化が見られるのは事実であるし、考古学的にも政治的に重要な地点であったと想定しうるような要素はみられないのは事実であり、少なくとも政治的には「辺境」の一地域であったと考えてよいだろう。

そうした点から考えると、この時期の、王朝が成立していく過程というのは、そういった地域の最も保守的な慣習でさえ変化させ、均質化してしまうような出来事であった、ととらえることができるのではないだろうか。あるいは、そうした出来事があったからこそ結果的に王朝と称し得るようなまとまりが成立したのではないかと考えることもできる。また、上述したように、メディアに関してはそれが王朝と称しうるようなまとまりを呈していたのか、ということ自体に疑問が呈される場合もあるわけだが、こうした点から見た場合、地域社会にこのような大きなインパクトを及ぼすような勢力であったという可能性も指摘することができるのではないだろうか。

そうした状況を具体的に考えてみたい。物質文化の地域

性が従来の地理的分断状況を超越し、それ以前とは継続性が低い物質文化が広範に広がり、あらたな中心地が出現することなどから、なんらかの形で地域社会の再編成が起こったと推測することも可能ではないかと思われる。その際、この時期におこる副葬される土器の斉一化という現象について考えることが重要であろう。この現象は、つきつめれば、土器や葬送慣習に関する情報が共有されている状態というようにとらえることができる。よって、この時期になると前の時期と比べて、そうした情報が地理的制約を越えて活発に行きかうようになったのではないかと想定することができる。しかしながら、情報が共有されていても、その状態が物質文化に発現するという保障はなく、共有されている情報が受容されてはじめて物質文化にその情報が具体的に現れることになる。この情報の受容という行為は自然に、あるいは恣意的に起こることもあれば何らかの強制力が行使された結果起こることもあるであろう。そのように考えると、この土器の斉一化という状況から、土器に関する情報が共有され且つ受容されている状態というようにとらえることができ、ひいては情報流通体制の変化が伴っていたのではないかということが推測されるのである。また、特に、今回対象としたのは副葬品としての土器である。これを葬送慣習の一部として捉え、且つ葬送慣習の上述したような特性を考慮すれば、その情報を受容するという行為が完了するには物理的な変化以上の変化が生じた可能性も指摘することができる。

こうしたことは、今回行った分析のみでは、すべて推測にとどまる。また、今回の分析で明らかになった物質文化の変化と、イラン系王朝の成立という歴史的事象とのあいだに因果関係があると断言することは現時点ではできない。しかし一方で鉄器時代Ⅲ期がイラン系王朝のまきに出現期と位置づけられることは確かであるし、それと同時期に地域社会で物質文化が大きく変化したことも事実である。よって、両者の因果関係の蓋然性を否定することはできないし、イランにおける王朝成立史に関する研究が上述したような現状である以上、この両者の相互関係をあえて積極的に考えていくことにはある程度の意義があるのではないかと思われる。

もちろん、同様の現象はその他の要因によっても起こり得る。例えば、生業の変化が想定できる。当該地域は移牧形態の生業が営まれていたと想定されている（山内 2000, 2006）。そうした活動が活発化したのであれば、外部からの影響や社会組織の変化がなくとも人間の移住などの内在的な要因によって結果的に土器が移動したとしても不思議ではない。ただし、こうした可能性についても上記の仮説と同様、更なる検証が必要であろう。

VI. おわりにー展望と課題ー

本稿では、従来様相が不明であったセフィード・ルード川西岸の遺跡から出土した新たな資料を分析し、デーラマン地域出土の資料を再検討することによって、今まで一様にとらえられがちであった当該地域における物質文化を葬送慣習をもとに時期ごと地域ごとに細分し、また、時期ごとのその性格を把握することができた。その結果、鉄器時代Ⅲ期には当該地域で新たな文化的中心地が誕生すると同時に、葬送慣習から見た場合の地域性が均質化していくというように、この時期が文化変容の画期である可能性を指摘することができた。また、そうした現象から鉄器時代Ⅲ期における歴史的事象に関して、若干の考察を加えることができた。

ただ、当該地域の文化変容に関していくつかの物質文化の変化はしてきてきたものの、その要因やそこから導かれた考察は推測の域を出るものではなかった。今後は、今回おこなった分析と提示した仮説を検証するためにも、今回指摘した現象をより面的に且つ対象地域を拡大して検証すること、また、他地域との比較や、土器以外の、特に鉄などのこの時期出現する遺物についても検証することを行いたい。その上で、メディアやアケメネス朝の成立といったことを、文献資料なども加味しながら、今後さらに考えていきたい。

謝辞

大津忠彦先生にはイランでの調査に同行させていただき貴重な資料を実見する機会を与えていただいたばかりでなく、そこで得られた資料の利用と個人的見解を発表することを許可していただいた。足立拓朗先生には日頃から様々な援助とご助言をいただいている。指導教官である西秋良宏先生には東京大学総合研究博物館所蔵資料の実見を許可していただき、本稿に関してもご指導いただいた。深く御礼を申し上げます。

本稿は日本西アジア考古学会第11回総会・大会において発表した内容を加筆・訂正したものである。

なお、本研究は日本学術振興会による平成17年度科学研究費補助金（基盤研究B / 課題番号14401030 / 研究代表者：大津忠彦）の交付を受けて実施された調査研究の成果の一部である。

引用文献

- 足立拓朗 2004 「イラン、ギーラーン州鉄器時代の土器編年再考」日本オリエント学会第46回大会：研究発表配布資料。
- 有松 唯 2005 「鉄器時代からパルティア時代にかけてのイラン、デーラマン地域の土器編年」『日本西アジア考古学会第10回総会・大会要旨集』34-38頁、日本西アジア考古学会。
- 江上波夫・深井晋司・増田精一 1965 『デーラマンⅠ ガレクティ、ラスルカンの発掘』東京大学東洋文化研究所。
- 江上波夫・深井晋司・増田清一 1966 『デーラマンⅡ ノールズマハレ、ホルムルードの発掘』東京大学東洋文化研究所。
- 大津忠彦・足立拓朗 2006 「2005年度イラン遺跡調査－「日本・イラン共同調査団」のギーラーン調査とその成果」『平成17年度

- 今よみがえる古代オリエント 第13回西アジア発掘調査報告会報告集』92-96頁、日本西アジア考古学会。
- 佐藤 進 1995 「メディア及びペルシアにおける民族と国家の形成」『オリエント』38巻2号 16-37頁。
- 曾野寿彦・深井晋司 1968 『デーラマンⅢ ハッサニ・マハレ、ガレクティの発掘』東京大学東洋文化研究所。
- 千代延恵正 2000 「デイラマーン再考」大津忠彦・岡野智彦編『ギーラーン踏査－1997、1998年度イラン遺跡踏査の記録－』32-40頁、中近東文化センター。
- 西秋良宏・三國博子・小川やよい・有松唯 2006 『東京大学総合研究博物館考古美術（西アジア）部門所蔵考古学資料目録 第7部 イラン、デーラマン古墓の土器』東京大学総合研究博物館。
- 深井晋司・池田次郎（編）1971 『デーラマンⅣ ガレクティ第Ⅰ号丘、第Ⅱ号丘の発掘』東京大学東洋文化研究所。
- 三宅俊成 1976 「デーラマン古墓出土の土器の考察」『江上波夫教授古稀記念論集 考古・美術篇』297-329頁、山川出版社。
- メトカーフ、P.・R. ハンティントン（池上良正・池上富美子訳）2001 『死の儀礼－葬送習俗の人類学的研究 第二版』未来社。
- 山内和也 2000 「ギーラーン州セフィードルード西岸の古墓群について」『西アジア考古学』1号 89-94頁。
- 山内和也 2006 「イラン・キルマズ渓谷の文化的景観の出現と変遷」『叢書 文化財保護制度の研究 文化的景観の成立、その変遷 第18回国際文化財保存修復研究会報告書』11-35頁、独立行政法人文化財研究所。
- Adachi, T. 2005 The Iron Age pottery from Tappe Jalaliye layer II, III. in Ohtsu et al. (eds.), 69-95.
- Cinquabre, D. 1978 Les tombes de l'Age du Fer en Iran du Nord-Ouest. *Paléorient* 4: 335-346.
- Curtis, J. 1995 *Later Mesopotamia and Iran: Tribes and Empires 1600-539 BC*. London, British Museum Press.
- Dyson, R. 1965 Problems of Protohistoric Iran as seen from Hasanlu. *Journal of Near Eastern Studies* 24: 193-217.
- Dyson, R. 1989 Rediscovering Hasanlu. *Expedition* 31(2-3): 3-11.
- Fahimi, H. 2005 Observations on the distribution of Iron Age sites on the Sefidrud river west bank. In Ohtsu et al. (eds.), 44-47.
- Fallahiyan, Y. 2004 Manifestion of Iron Age I culture in the ancient cemetery of Jamshidabad in Gilan. *Archaeological Reports* 2: 217-237.
- Fukai, S. and Matsutani, T. 1978 *HALIMEHJAN II: The Excavation at Lameh Zamin*. Tokyo, The Institute of Orient Culture, The University of Tokyo.
- Genito, B. 2005 The archaeology of the Median Period: An outline and a research perspective. *Iranica Antiqua* 40: 315-340.
- Haerincq, E. 1988 The Iron Age in Guilan: Proposal for a chronology. In Curtis, J. (ed.), *Bronze- working Centres of Western Asia c. 1000-539 B.C.* 63-78. London and New York, Kegan Paul Internatuional.
- Hakemi, A. 1968 Kaluraz and the civilization of the Mardes. *Archaeologia Viva* 1: 63-65.
- Hakemi, A. 1973 Excavation Kaluraz, Gilan. *Bulletin of the Asia Institute of Pahlavi Museum* 3: 1-7.
- Medvedskaya, I.N. 1982 *Iran: Iron Age I*. BAR 126. Oxford, Archaeopress.
- Minorsky, V. 1932 *La Domination des Dailamites*. Publications de la Sciété Etudes Iraniennes et de l'Art Persan 3.
- Negahban, E. O. 1968 MARLIK a royal necropolis of the second millennium. *Archaeologia Viva* 1: 59-62.
- Negahban, E. O. 1996 *Marlik: The Complete Excavation Report*. Philadelphia, University of Chicago Press.
- Ohtsu, T., K. Yamauchi and J. Nokandeh (eds.) 2005 *Preliminary Report of*

- the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Fourth Season*. Tokyo, Iranian Cultural Heritage and Tourism Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Ohtsu, T., K. Yamauchi, J. Nokandeh and T. Adachi (eds.) 2006 *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Fifth Season*. Tokyo, Iranian Cultural Heritage and Tourism Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Sancisi-Weedenburg, H. 1985 What about the Median Empire? *Fifth Achaemenid History Workshop*: 1-17.
- Sancisi-Weedenburg, H. 1987 Decadence in the empire or decadence in the sources? From sources to synthesis: Ctesias. In H. Sancisi-Weedenburg (ed.) *Achaemenid History I: Sources, Structures and Synthesis, Proceedings of the Groningen 1983 Achaemenid History Workshop*, 33-45. Leiden, Nederlands Instituut voor Het Nabue Costen.
- Sancisi-Weedenburg, H. 1994 The orality of Herodotus' *Medikos Logos* or: the Median Empires revisited. In H. Sancisi-Weedenburg, A. Kuhrt and M.C. Root (eds.) *Achaemenid History VIII: Proceedings of the Last Achaemenid History Workshop*, 39-55. Leiden, Nederlands Instituut voor Het Nabue Costen.
- Young, T. C. 1964 A comparative ceramic chronology for Western Iran, 1500-500 B.C. *Iran* 3: 53-85.

有松 唯

東京大学大学院人文社会系研究科修士課程

Yui ARIMATSU

The University of Tokyo